

フロントインタビュー「いま、輝く女男」

「モーハウス」代表（モネット有限公司 代表取締役）

光畑 由佳さん

自らの出産・育児体験をもとに、おっぱいライフを快適にする「授乳服」づくりと子連れ出勤の実現などを通して、女性の自然なライフスタイルを発信し続ける光畑由佳さん。このたび、内閣府主催の平成二十一年度『女性のチャレンジ賞』を受賞しました。

これからの少子高齢化社会では、仕事と生活を混ぜた「ワークライフミックス」が必要、という光畑さんの思いをうかがいました。

授乳服にこめたママへの
応援メッセージ

十五年前、初めて体験した出産は、とてもエキサイティングで素晴らしい体験でした。でも実際の子育てでは、外出時の授乳場所にも困り、子連れママの不自由さをやというほど実感。そこで、おしゃれで機能的な授乳服を通して、活動的なママのライフスタイルを提案しようと思いました。



ところが、この仕事を始めた十二年前、授乳服はほとんど売れませんでした。当時、子連れ外出の窮屈さは仕方がない、我慢する、という考え方のお母さんが多かったからです。

そこで私はまず「我慢しなくていい、出産や育児は楽しんでいい、自分も生活も大切にしたい」ということを伝えるイベントやサロンを始めました。最近では、育児は我慢するものではなくて自然なもの、授乳も生活の一部、ということが徐々に浸透してきたように思います。

生き方の選択肢は
多い方がいい

私たちの会社「モーハウス」では、ママたちは子連れで出勤し、赤ちゃんを抱っこやおんぶして仕事をしています。もちろん、おっぱいを飲ませる人もいます。子どもた

出産も育児も仕事もたのしみたい！

ちも静かで、周囲のだれに抱っこされてもここにしています。青山の表参道駅近くのショップでも、つくば市内のデパートでも、子連れのスタッフがいます。お客様には最初びっくりされますが、意外とすんなり受け入れていただいています。

考えてみると、少し前の日本では、赤ちゃんをおんぶしながら店番をしている商店や、かごに入れて畑に連れて行く風景が普通にありました。それがいつの頃からか、仕事と育児は切り離され、仕事場に生活を持ち込んではいかない、という空気が当たり前のようになってしまったわけです。効率を求めた時代はそれでよかったのかもしれませんが、これからはどうでしょうか。少子高齢化により労働力が減っていくこれからの時代、生活を会社に持ち込めない企業は、そのために失ってしまう人材もあるでしょう。切り離されてしまった「生活」と「仕事」は、もう少しつながりを取り戻してもいいのかもしれない。

一人ひとりに合う生き方の
バランスを

子連れ出勤は、仕事と生活を混ぜる「ワークライフミックス」とでも呼べる形かもしれません。「子どもがいるから何もできない」状態から「子どもを連れて仕事をする」という状態に変わることができたら、その間には、生活のほ

か趣味や遊びなど、たくさんの可能性と選択肢が生まれることを感じてもらいたいと思います。

選択肢が増えることは、気持ちを楽しんでくれます。「母親ってこうあるべき」「仕事ってこうあるべき」といった先入観を取り払って、肩の力を抜いてみては。私たち個人個人は、生活も仕事も趣味も育児も、いろんなものでできています。ワークとライフだけじゃなく、そんないろんなもののバランスを取っていくことが、ラクに生きるコツなのではないかと思っています。

【プロフィール】 光畑 由佳（みつはた・ゆか）

「モーハウス」代表（モネット有限公司 代表取締役）

倉敷市生まれ。お茶の水女子大学被服学科を卒業後、パルコで美術企画を担当。その後建築関係の出版社を経て、自身の出産・育児体験を基に「授乳服」の製作を開始。女性が自分らしいライフスタイルを楽しむことを支援する「モーハウス」を

設立。出産・育児という人生の節目を迎えた女性のライフデザインを支援する活動団体「マザー・ライフ・アソシエーション（通称：らくふぁむ）」の立ち上げを進めている。

3児の母。 モーハウス <http://www.mo-house.net/>

▲新著『働くママが日本を救う！「子連れ出勤」という就業スタイル』
（毎日コミュニケーションズ 「マイコミ新書」）

